日本台湾学会第 14 回学術大会記念講演

台大哲学系事件の回顧

趙　天　儀
（松永正義訳）

第 2 次世界大戦における日本の敗戦後、国府が台湾を接収、台湾行政長官公署の長官は陳儀、初代の台湾教育処処長は范寿康だった。范寿康は日本の東京帝国大学東洋哲学科の卒業生で、それゆえ戦後台湾の各教育機関、各級の学校は、ほとんど事情を知った彼の手で接収されたものと言っていい。日本時代の台北帝国大学には文政学部があり、戦後これに医学専門学校、法商専門学校をあわせて国立台湾大学（以下、台大）とされ、文学院、理学院、法学院、医学院、工学院、農学院の 6 学部があった。

日本時代の台北高等学校は台湾師範学院となり、のちに国立台湾師範大学となった。これらと台中農学院、台南工学院、および台湾で再建された国立政治大学をあわせて「五大院校」を形成した。のち台中農学院は国立中興大学となり、台南工学院は国立成功大学となった。

Ⅰ　戦後初期台大哲学系の概況

1947 年 2 月不幸にも二・二八事件が起こり、陳儀長官は辞職、范寿康も辞職して台大哲学系の教員となった。台湾省政府となって初代の省主席は魏道明、初代の教育庁長は許恪士であった。許恪士はドイツ留学経験者で、これも辞職後は台大哲学系の教員となった。

林茂生教授は日本留学後、さらにアメリカへ留学、コロンビア大学で哲学博士となった。日本時代は台南工業専門学校、すなわち今の国立成功大学で教え、戦後台湾大学先修班（予科）の主任となり、また哲学系主任、さらに文学院院長を務めた。

東京帝大西洋哲学科卒業の洪耀勲は北平師範大学から帰台し、早稲田大学大学院西洋哲学科卒業の曽天従は「満州国」の遼寧大学から帰台していたが、ふたりとも林茂生の推薦で先修班の教員となり、あわせて台大哲学系にも属した。しかし京都帝大西洋哲学科を卒業し、京大の田辺元教授の研究室で研究を続けた黄金穂は、戦前に帰台し台北帝大の総合図書館に勤めていたものの、哲学系の教員になる機会はなく、新竹の女子中学で教えながら台北延平学院の創設に関わったが、二・二八事件中に沖縄へ逃れ、米軍のもとで通訳をした。事件が収まってのち私立延平中学で教え、夜間部主任となった。また大同工学院などでも教えた。

また日本から戻ってきた東京帝大政治科の彭明敏、東京帝大法学科の劉慶瑞、京都帝大農経科の李登輝などは、みな前後して台大先修班に入り、みな台大を卒業した。

わたしは 1956 年に台大哲学系に入った。当時の系主任は曽天従教授で、「知識論」、「形而上学」、

「論理学」を教えた。1957 年洪耀勲がアメリカ、テキサスのオースティンでの在外研究から戻って系主任を継いだ。彼は「西洋哲学史」、「インド哲学史」、「名著選読：カント」、「名著選読：ニーチェ」を教えた。范寿康は「中国哲学史」、「朱子哲学」を教え、許恪士は「倫理学」、「歴史哲学」を教えた。方東美も系主任になったことがあるが、彼は「プラトン」、「人生哲学」、「大陸理性論」、「文化哲学（智恵類型と文化精神、とも言った）」を教えた。呉康は「孔孟荀哲学」、「老荘哲学」、「哲学概論」を、虞君質は「論理学」、「美学概論」を教えた。殷海光は 1947 年にアメリカ、ハーバード大学の在外研究から帰り、「論理学」、「ラッセル哲学」、「意味論」、「科学の哲学」を教えた。非常勤講師の趙一葦は「アメリカ哲学」、「デューイとホワイトヘッド」を教えた。1958 年黄金穂が非常勤講師となり、「数理哲学」、「数理論理学」を教えた。助手から講師にあがった黄振華は、のち西ドイツへ留学した。助手の黄季媛は、退職後亜東関係協会へゆき、東京で勤めたことがある。助手の傅偉勲はハワイ大学東西文化センターの奨学金を得てハワイへ留学、またカリフォルニア大学バークレー校にも 1 年いた。さらに陳大斉教授は、「論理学」、「儒家哲学」を教えたが、国立政治大学が台湾で再建されるにあたり、そちらへ引き抜かれて校長となった。

以上が台湾戦後初期、とりわけ 1956 年から 1961 年にかけての台大哲学系の概況である。

Ⅱ　台大哲学研究所の頃

1961 年わたしは第 9 期予備軍官の兵役を終えて、台大哲学研究所（哲学科大学院）へ戻り院生となった。当時哲学系の教授の多くは 70 歳前後で、学部の学生はみなちゃんとした勉強ができず悩んでいた。そこでわれわれ院生が発起して台大哲学研究討論会を組織した。毎週金曜の夜、大学院生が順番に講師となり、自己紹介をしてから 2 時間ほどの読書報告をした。これは全学的な講演会のようなものとなり、大変盛んになった。わたしは「詩の言語分析」を講じたが、李敖はこれを「詩が分析できるものか。分析したら無くなってしまう」と評し、殷海光は「内面の世界から美しい花が開いた」と言ってくれた。

われわれの代で前後して助手となったものには徐頌鵬、許登源、趙天儀、何秀煌らがいる。徐頌鵬、許登源、何秀煌らはみな前後してアメリカへ留学した。講演会の第 2 期（1962 年）には、その年の台大哲学系学会会長胡火山が 14 名の講演者と演題のリストを公表した。そこには大学院生、助手、講師の演者があり、また他系のもの、たとえば楊国枢、李敖、王尚義、洪成完らの名がある。講演にはいつも洪耀勲主任、殷海光教授が指導に臨んでおり、静かに講演を聴いていた。こうして一種の全学的な学術討論会となってゆき、それゆえ台大の学校当局が出てきて禁止してしまった。

当時台湾は『自由中国』、『民主評論』、『文星』などの啓蒙的雑誌の影響下にあった。『自由中国』は胡適、雷震、殷海光、夏道平、張佛泉、宋文明、傅正らの影響下にあって、「今日の問題」、「蔣総統七十華誕祝寿専号」、「反対党問題」、「台湾地方自治改革委員会」などの議論を提出し、それゆえ中国民主党の創立前夜に、雷震が逮捕された。雷震事件である。また『自由中国』は停刊させられた。自由中国事件である。

『民主評論』は徐復観の主編で、香港と台湾の新儒家を形成し、「中国文化本位宣言」を発表した。銭穆、唐君毅、牟宗三、徐復観らは中国儒家哲学の復興をめざした。いわゆる香港台湾新儒家運動である。

『文星』は「思想的、芸術的、生活的」をスローガンとし、李敖、許登源、洪成完らが評論を書いて、『中華』雑誌の胡秋原と対立し、中西文化論戦を引き起こした。

こうしたことから殷海光は国民党台湾保守勢力の公敵となり、「反攻無望論」の提唱者であり、中西文化論戦の黒幕だとみなされた。そこから殷海光が台大哲学系の辞職を余儀なくされていく一連のプロセスが作られていった。だから台大哲学系事件の最初の事件は「殷海光事件」なのである。

そのころ台大では二・二八事件、四・六事件につぐ大事件として、彭明敏、謝聡敏、魏廷朝の3人による「台湾自救宣言」事件があり、3人ともに逮捕されたが、彭明敏は「逃亡」に成功し、アメリカで『自由の滋味』を出版した。まず英語版があり、のちに中国語版が出た。

彭明敏と殷海光は当時の台大の2人の名教授であり、2人とも自由主義思想の啓蒙者であった。彭明敏は今は台湾に帰っている。殷海光は癌のため50才になろうとする時に世を去った。黄金穂も52才で病逝した。

Ⅲ　成中英、台大哲学系主任を継ぐ

1970年台湾教育部は70才以上の教授の国立大学退職を決定、台大哲学系では教授の范寿康、許恪士、呉康、洪耀勲、方東美、虞君質らが次々と退職した。

こうしたわけで19年にわたって台大哲学系の主任を務めた洪耀勲教授も退職しなければならなくなった。成中英は台大外文系の卒業で、アメリカのハーバード大学の博士、ハワイ大学哲学系の教授で、台大哲学系に客員教授として来ていた。そこで台大当局は彼を台大哲学系主任に招いた。成中英は主に「アメリカ哲学」、「言語哲学」、「科学哲学」などを講じた。アメリカでは英語版の雑誌『中国哲学』を創刊し、前後2回台大で客員教授となり、また『台大哲学評論』を創刊した。

1970年8月成中英は台大哲学系主任を継いだが、すぐにアメリカのエール大学の招きを受け、その客員教授に行くことになった。そこで文学院院長朱立民が主任代理を1年務め、その後趙天儀が代理を2年務めた。その間前後3年で、後ろ2年を務めた趙天儀は学校当局から正式に主任代理を委嘱されている。

国府は国連の議席を失い、また釣魚台（彭佳嶼）事件が台大の東南アジア留学生のデモを引き起こした。台大哲学系准教授の陳鼓応は釣魚台事件に介入し、また台湾で学生運動を起こすことを主張した。これらは当時の国府のタブーを犯すものだった。

そこで台大でいわゆる「民族主義座談会」が行われたとき、哲学系准教授陳鼓応と大学院生馮滬祥とのあいだで激しいやりとりがあり、陳鼓応は馮滬祥を「スパイ学生」と呼び、哲学系の学生銭永祥もこれに呼応した。ここからいわゆる台大哲学系スパイ学生事件が起こった。

釣魚台事件を鼓吹したものとしては、アメリカのボストン大学で郁慕明、趙少康らが刊行した『ボストン通信』がある。のちの『愛盟』である。またカリフォルニア大学バークレー校には劉大任、郭松棻らの刊行した『バークレー通信』があった。国府を批判したため台湾の『中央日報』に劉匪、郭匪とされた。彼らはそれ故に博士課程を修了することなく、2人とも国連に入って翻訳官となり、退職までそこで働いた。劉大任と郭松棻は2人とも小説家、評論家となった。劉大任には長編小説『浮遊群落』があり、岡崎郁子の日本語訳がある（訳題は『デイゴ燃ゆ』）。郭松棻には『郭松棻集』、『走る母親』、『双月記』がある。『双月記』は巫永福文学賞を得た。劉大任は台大哲学系でわたしと同期、郭松棻は1期下で、哲学系から外文系に転じたが、わたしと同じ年に助手となった。彼は外文系の助手でわたしは哲学系の助手だった。

台大外文系教授の蘇維熊は東京帝大英文科卒業で、台大外文系では「英詩選読」、「シェークスピア」を教えた。彼はかって「詩はがまんして読め、女房はがまんして使え」と言った。また「大学でもっとも勉強するのは助手だ、だから一番学問がある。その次は講師、またその次が准教授で、もっとも学問のないのが教授だ。彼らはもうあまり本を読まないから、学問がないのだ」と言った。蘇維熊が病気になったため、「英詩選読」を郭松棻が代講したが、非常に評判になった。蘇維熊には『英詩韻律学』、『蘇維熊文集』の著がある。

台湾の教育部は以前国家文芸賞を出していたことがある。第1回の受賞者は于右任で、党国の大老、伝統詩の重鎮だったから異議はなかった。第2回は陳含光で、彼は詩の中で清朝の遺民をもって任じているそうで、それゆえ台湾師範大学の李辰冬教授は、彼は漢奸だから賞を与えるべきでない、と批判した。台大哲学系教授の陳康はかってドイツへ留学し、フォン・ハルトマンの高弟だった。陳康は『祖国週刊』、『自由中国』に文章を書き、彼の父親を弁護した。1957年の夏彼はイタリアでの世界哲学会議に出席し、その後アメリカの大学の哲学系に職を得、台湾というこの理非曲直の明らかでない土地を、遠く離れてしまった。

陳康はかってプラトンの対話編のひとつ「パルメニデス」を訳し、また『陳康哲学論文集』の著がある。これは台湾の聯経書店版と大陸版があるが、内容は大同小異である。陳康教授はかって台大哲学系図書館の中で「これだけの哲学書を買える日本の教授は本当にたいしたものだ」と言ったそうだ。台大哲学系図書館の蔵書はほとんどが台北帝大から引き継いだもので、中に京都帝大の美学の教授深田康算がヨーロッパ留学中に買ってきた本がある。モスクワ、ベルリン、パリ、ロンドンなどで買われた西方の名著で、台北帝大に寄贈されて、「深田文庫」となった。深田康算には4冊の『深田康算全集』という遺著がある。

台大哲学系の同輩、先輩の中で、もっとも陳康教授を尊敬していたのは張柯圳である。彼はギリシャ語、ラテン語、ドイツ語が出来、陳康を見習おうとしていた。陳康はプラトン、アリストテレス、ギリシャ哲学の専門家だった。張柯圳とわたしは同時に哲学系に入り、わたしがまず助手になり、そこから講師になった。彼は直接講師になり、国家科学委員会の補助を得てドイツに留学、前後6年ドイツにいた。彼の出国時にはわたしはまだ主任代理ではなく、帰国時にはすでに主任代理をやめていた。しかしそれでも彼はわたしの家へ来て、彼がまだ助教授になっていないのは、わたしがいけないのだと言った。わたしは彼に尋ねた。一、博士の学位を取ったか？彼

は「取っていない」と答えた。二、わたしは哲学系から、論文をよこして助教授への昇格を申請するように通知しなかったか？彼は「通知はもらったが、論文を送って申請することはしなかった」と言った。学位もなく、論文も送らなかったというなら、それはわたしのせいとは言えない。もちろん彼はのちに昇格し、『ギリシャ文化哲学』の著作がある。

日本の東京大学に留学し、インド哲学、仏教唯識論を専攻した葉阿月女史は、中村元教授の学生だ。彼女が東大で博士の学位を取った時、講師として出国したのだから、講師として帰国し、改めて昇格を申請するか、博士としての待遇に改めるのがすじだ。しかし彼女は事務手続きを踏まず、あちこちに訴えて、わたしへの圧力を作り出した。その時台大法律系主任の王澤鑑は、事情を理解してからはなにも言わなかったし、台大農経系教授の李添春もはじめは重大視していたが、状況を理解してからは、なにも言わなくなった。

Ⅳ　鄔昆如昇格事件

台大哲学系で当時最もわたしと対立していたのは、ドイツ留学者の鄔昆如助教授で、彼は香港からの留学生として台大哲学系に学び、西ドイツで学位を得、台大哲学系の客員助教授となっていたが、ひそかに成中英のことを監察院に訴えたことがある。当時の文学院院長朱立民先生は、わたしを彼の執務室に呼んで「成中英を訴えたのは誰だ、陳鼓応か」と尋ねた。わたしは「陳鼓応ではありません。たぶん鄔昆如でしょう」と答えた。のちにわたしの判断の正しかったことが、事実によって証明された。鄔昆如は助教授として3年を勤め、論文を提出して昇格を求めた。わたしは所定の事務手続きに従って推薦を行った。

しかし予想もしなかったことに、彼は昇格のための資料一式を某立法委員に渡し、台大学長の閻振興に昇格を要求した。これらの資料は学長から文学院長の朱立民に回され、台大文学院の昇格院務会議に提出されて、公に議論されることとなった。朱院長は言った。「この件はおそらく主任代理の趙先生に面倒を引き起こす可能性がありますから、委員の皆さんのご意見をいただき、院務会議の記録にのこしましょう」。

最初に発言したのは前文学院院長沈剛伯教授で、彼とわたしの問答は、「鄔先生は本学の卒業生ですか」、「はい」、「なぜこんなふうになるのですか」というものだった。2番目の発言者は中文系主任の台静農教授で、「われわれ台大では、以後の昇格には総統の指示が要るのですか」と問うた。

屈萬里、顔元叔ら他の委員は互いに、「彼はあなたに賛成票を頼みに来ましたか」と尋ねあい、みな賛成を頼まれたことを確認した。その日投票した教授は、中文系の台静農、毛子水、屈萬里、張敬、外文系の朱立民、顔元叔、歴史系の李邁先、孫同勛、哲学系の趙天儀、考古人類学系の唐美君、図書館学系の周駿富である。投票の結果は賛成がわずか1票しかなく、残りはすべて反対票だった。こうしてこの昇格事件は一段落を告げた。

事が終わってわたしは文学院院長の朱立民に詫びた。彼は言った、「たぶんあの1票はあなたなのでしょう」。

Ⅴ　台大哲学系の粛正

1974 年台大哲学系では大粛正があり、専任、非常勤をあわせて 12 名の教員を解雇した。かつて台大軍訓処総教官であった張徳溥先生は多くの台大教授を執務室に招き、コーヒーをふるまったが、彼はこんなふうにわたしに言った、「趙先生、われわれの閻学長は、絶対に敵を作らないが、また絶対に責任を取らないのですよ」。

その年に国民党は海外の学者に台大哲学系事件の説明のビラを送り、物語を捏造した。いわく「趙某々は某日台大の酔月湖畔に台大哲学系の学生を集め、哲学系を批判し、さらに某教授の『哲学概論』を買ってはいけないと言った」云々。

第 1 にわたしには当時すでに行政権はなく、学生を集める権限を持っていない。また第 2 に、そもそもわたしは酔月湖畔には居なかった。第 3 に、当時某教授の『哲学概論』はまだ出版されていなかった。よってこれが嘘であることがわかろう。

台大哲学系事件に関心を持っていた立法委員の康寧祥は、かつてわたしと李日章にインタビューしてコーヒーを飲んだときに、「国民党は闘争に際して、一に金で陥れ、二に女で陥れ、相手をやっつけようとする」と言ったが、わたしはここにもう 1 つを加えて、彼らは嘘の物語で相手を陥れると言いたい。

1979 年趙天儀は『台大哲学系事件真相』を著したが、当時はまだ風声鶴唳、みな怯えていた時期で、反響は寂しいものだった。1995 年 5 月台大哲学系事件調査小組が『台大哲学系事件調査報告』およびその『附冊』を公刊した。

台大当局は当時の受難者の名誉回復を公布した。

一、陳鼓応、王暁波、李日章、胡基峻の 4 名は台大に復職する。
二、趙天儀、黄天成、楊裴華の 3 名は補償金を得る。

ある人がなぜ台大に戻らないのかと尋ねたが、(1) 名誉回復の年にはわたしはすでに 64 才で、台大に戻っても 1 年を残すのみだ、(2) わたしは国立編訳館を退職した年に、すでに退職年金を受け取っている、(3) わたしは静宜大学の学生には「仏も済度できるのは縁のあるものだけだ」と語っている、(4) わたしは補償金の 60 万元に 40 万元を加えて、静宜大学に「趙天儀文学奨学金」を作り、静宜の学生が文学の創作あるいは研究に従事するのを援助することとした。